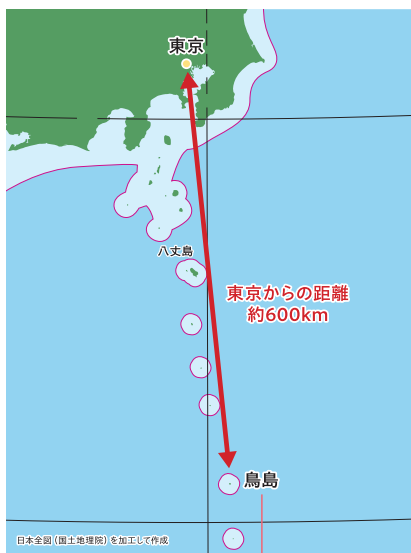


島々の歴史と現在

鳥島（伊豆鳥島）

アホウドリが繁殖する活火山の島

江戸時代、多くの漂流者によって認知されるようになった鳥島。明治時代には玉置半右衛門が鳥島でアホウドリ羽毛事業をはじめ、1897（明治30）年、東京府に編入されました。現在は火山活動の活発化で無人島となっていますが、アホウドリの営巣地として知られ、島全体が国の天然記念物になっています。



直径約2.5km、周囲約7kmほどの火山島で、2002年にも噴火活動がありました。現在は無人島です。

西暦	できごと
1681年	土佐船の漂着。（現存する最古の漂流事例。）
1887年	玉置半右衛門が鳥島でアホウドリ捕獲事業を開始。
1897年	閣議決定により小笠原島※付属となる。
1901年	八丈島の付属となる。
1902年	火山噴火で住民全員が亡くなる。
1939年	海軍水路部の観測所が置かれていたが、再噴火により無人島となる。
1947年	中央気象台鳥島測候所が開設。
1965年	鳥島が国の天然記念物（天然保護区域）に指定される。火山性地震により測候所が閉鎖。

※「小笠原島」は、現在の小笠原諸島ではなく、父島列島および母島列島を中心とするより狭い範囲を指します。



鳥島全景 提供:海上保安庁（2020年撮影）



鳥島2002年噴火 提供:海上保安庁

漂流者による鳥島発見 ―江戸時代、鳥島に漂着した人々―

鳥島には江戸時代、多くの漂流船が漂着しました。現在も残る最古の記録は1681（延宝9）年、土佐の船で、その後1841（天保12）年に中濱万次郎が漂着するまでの間に13回もの漂流事例が残っています。なかには、野村長平のように鳥島で12年にもおよぶ漂流生活をした者もいました。

長平は、土佐出身の船乗りで、1785（天明5）年、仲間3人とともに鳥島に漂着しました。彼らは生きていくためにアホウドリを捕まえました。火を起こす道具を持っていなかったためアホウドリを生で食し、アホウドリの羽を縫い合わせて敷物や衣服をつくり生活していました。その後、偶然流れ着いた別の船の漂流者とともに船を造って島を脱出することに成功しますが、無人島であった鳥島は、長平や万次郎など、漂流者らの奇跡の生還によって認知されるようになりました。

アホウドリを求めて ―明治時代に入植した開拓民―

たま おき は ん え も ん

玉置半右衛門の鳥島での事業

1887（明治20）年、八丈島出身の実業家、玉置半右衛門は、鳥島のアホウドリの大群に着目し、東京府に鳥島の借地を申し出ました。玉置は、東京府から借地の許可は得られなかったものの硫黄島へ向かう予定だった明治丸への乗船及び鳥島への寄港は許可され、鳥島に上陸し、アホウドリの羽毛をとる事業を開始します。そして翌年、東京府に再び、鳥島の借地を申し出た結果、1897（明治30）年までの開拓の許可を得ました。

1897（明治30）年5月、鳥島が八丈島・小笠原島間にあるなどの理由で日本版図たることは明確であると東京府が内務省に上申し、8月に小笠原島の所属とする閣議決定が行われます。

同年、玉置は、10年間の借地延長を申請します。玉置がアホウドリの捕獲のみを実施しており、開拓が行われていなかったことへの批判はありましたが、1898（明治31）年9月さらに10年貸付期間が延長されます。

アホウドリの羽毛は布団や帽子の飾りに使われ、当時のヨーロッパで高値で取引され、玉置は、1896（明治29）年に全国の長者番付に名を連ねました。その後、鳥島のアホウドリは乱獲によって減少し、玉置はさらなる羽毛を求め、北大東島・南大東島（沖縄県）の開拓に乗り出しました。



玉置半右衛門

所蔵：国立国会図書館ウェブサイト

クリック「鳥島置き去り事件!？」



1888年頃に撮影された鳥島のアホウドリの集団
提供：小笠原村教育委員会

アホウドリのたたり!？

1902（明治35）年、鳥島では125名の島民が暮らしており、通称「玉置村」も形成されていました。しかし、火山の噴火で、住民全員が亡くなるという悲惨な出来事があり、当時「アホウドリのたたり」として人々に恐れられました。



人もアホウドリも消えた「旧玉置村」。この溶岩流の下に玉置村があった。
提供：山階鳥類研究所フェロー 佐藤文男氏



無人島にもどった鳥島 ―アホウドリの営巣地として―

開拓民らによる乱獲で個体数が激減し、一時は絶滅したと言われたアホウドリですが、1951（昭和26）年に鳥島でごく少数が再発見され、その後多くの方々の保護活動により現在その個体数は回復傾向にあります。

鳥島は、1965（昭和40）年の激しい火山性地震により、戦後設置された気象観測所の職員も全員引きあげ、現在まで無人島となっていますが、尖閣諸島（沖縄県）、聳島（小笠原諸島）などとともにアホウドリの営巣地として知られ、島全体が国の天然記念物（天然保護区域）に指定されています。現在は東京都の出先機関である東京都八丈支庁が島を管轄しています。

島々の歴史と現在

南鳥島

「幻の宝島」を探して見つかった島は「現代の宝島」に

南鳥島は、東京都小笠原村に属する島で、日本の最東端として知られています。南鳥島の基線を根拠とした排他的経済水域は、国土面積より大きい約43万km²にも及び、周辺海域では貴重な海洋鉱物資源が発見されています。周囲6kmほどの小さな島は、日本にとって計り知れない大きな役割を果たしています。



【位置】

船で片道4～5日、航空機では片道4時間の距離。日本最東端に位置することから日本で一番早い「初日の出」を見ることができる場所です。

【気候】

熱帯気候と亜熱帯気候の推移帯にあります。年平均気温は26度前後。年間の気温変化が小さいのが特徴です。

面 積

1.51km²

人 口

一般住民は0人。政府職員20数名程が駐在。
(国土交通省、気象庁、海上自衛隊)

西暦	できごと
1543年	スペイン人、デ・ラ・トーレによって発見。(諸説あり。)
1860年頃	アメリカ人宣教師によって「マーカス島」と命名。
1896年	水谷新六が上陸、小笠原から23名が移住。
1898年	「南鳥島」と命名され、東京府小笠原島庁に編入。
1902年	南鳥島事件。
1935年	海軍気象観測所開設。
1936年	海軍大演習に合わせて飛行場建設。
1946年	SCAPIN-677により日本の施政権から分離。
1952年	対日平和条約の発効により米国施政下に。
1968年	小笠原諸島とともに日本に返還、航空派遣隊発足、気象観測所設置。
2010年	「排他的経済水域及び大陸棚の保全及び利用の促進のための低潮線の保全及び拠点施設の整備等に関する法律」が施行、「特定離島」に指定。
2011年	国による特定離島港湾施設整備の着工。



海上自衛隊隊舎 写真提供:小笠原村



気象庁庁舎 写真提供:気象庁

島の現在

2011(平成23)年 国土交通省による特定離島港湾施設整備が着工され、船舶の係留、停泊、荷さばき等が可能となる港湾施設の整備が行われています。

クリック

「特定離島」とは？



写真提供:小笠原村

偶然の発見から日本の領土として編入

1896 (明治29) 年12月、三重県桑名出身の水谷新六は、「グランパス島」という幻の島を探す中で、当時、欧米ではマーカス島と呼ばれた南鳥島を発見します。島にアホウドリの群れを確認すると島でのアホウドリ捕獲事業を開始。翌年、「島嶼発見届」を内務省に、さらに同島の「借用願」を東京府に提出しました。

内務省是水谷からの上申書を検討し、台湾とフィリピン間のバシー海峡の中央の緯度から北を日本、南をスペイン領とする1895 (明治28) 年の「国境確定ニ関スル日西両国宣言」から当然に日本に属すると考えます。しかし、その後政府内で議論を重ねる中、他国による占領がないこと及び水谷が開拓に従事していることにより「国際法上所謂^{ウツラス}占領ノ事実」があるとして、1898 (明治31) 年7月、閣議決定により本邦所属とし、「南鳥島」として小笠原島司の所管に編入されました。

南鳥島ではその後、アホウドリ羽毛事業に加え、鳥類のはく製事業、リン鉱石の採掘事業が行われました。



水谷新六
出典:『日本少年』10巻13号、1915年
所蔵: 国立国会図書館

クリック 水谷の「本音」と東京府の「建前」

クリック 「国境確定ニ関スル日西両国宣言」と南方の島々の編入

クリック 「無主地先占」と日本領土であることの再確認について

日本領編入後、あわやの一大事・・・「南鳥島事件」

1889 (明治22) 年マーカス島を訪れたアメリカの実業家ローズヒルは、米国政府からグアノ (鳥の糞が化石化したもので肥料となる) の採掘権を取得、1902 (明治35) 年に南鳥島で事業を行おうと船で出発します。

新聞報道でそれを知った日本政府は、軍艦を派遣、ローズヒルの船の数日前に南鳥島に到着します。その後、島についてローズヒルに事情を説明し、米船を退去させました。ローズヒルは米政府に所有権の確認と日本政府への損害賠償の要求を求めましたが、米政府はこれを拒否しました。

クリック アメリカ・グアノ島法とハワイ方面での日本人の鳥関連事業

南鳥島は「現代の宝島」

南鳥島周辺海域では、パソコンなどの電子機器製造に不可欠な希少価値の高いレアアースを含む泥等、貴重な海洋鉱物資源が発見されています。

また、人間活動の影響が極めて小さいこの島は、大気環境観測において理想的な場所であることから、日本で唯一、世界気象機関 (WMO) における世界30観測点 (2021年10月時点) の全球大気監視計画全球観測所に指定されています。



南鳥島全景 写真提供:海上自衛隊

島々の歴史と現在

沖大東島

国内随一の良質のリン鉱石を誇った島

南大東島の南方160kmにある沖大東島は、欧名をラサ島といい、面積1.19km²の隆起サンゴ礁の島です。1900（明治33）年、中村十作の内務省への「ラサ島借用願」の提出を契機に、閣議決定により沖縄県島尻郡大東島の区域に編入されました。

その後、国内随一の良質のリン鉱石がとれることがわかり、採掘権をめぐって、玉置半右衛門（鳥島・大東島で事業実施）、水谷新六（南鳥島で事業実施）、西澤吉治（東沙島でリン鉱石採掘を実施）、恒藤規隆（農商務省肥料鉱物調査所長）などが競争を繰り広げ、訴訟に発展します。最終的に、恒藤が競争者に示談金を払うなどして、すべての権利を手にします。

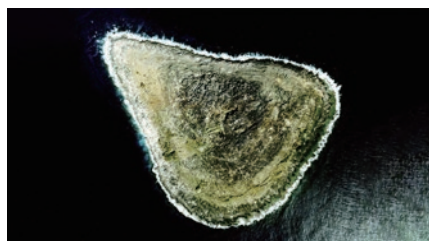
恒藤は、1911（明治44）年「ラサ島磷鉱合資会社」（後に株式会社）を設立、第一次大戦で、肥料の輸入が止まったこともあり、事業は最盛期を迎え、1918年には2000人近くが島に居住していました。

しかし、戦後の不況で打撃を受け、1929（昭和4）年にいったん事業を停止。1933（昭和8）年に業務再開しますが、第二次大戦の戦況悪化により1945（昭和20）年に事業を停止します。

戦後は全域が米軍の射爆場となっており、一般の立ち入りは禁止されています。



恒藤規隆
出典：恒藤規隆『予と燐礦の探検』



沖大東島航空写真 出典：国土地理院

西暦	できごと
1807年	フランスの軍艦カノエニル号がラサ島と命名したとされる。
1892年	軍艦「海門」が沖大東島を調査。上陸し標柱を設置。
1900年	閣議決定により、沖大東島と命名され沖縄県島尻郡編入。
1906年	沖大東島の岩石が良質なリン鉱石と判明。
1911年	恒藤規範は「ラサ島磷鉱合資会社」を設立。本格的な沖大東島でのリン鉱石採掘を始める。
1918年	リン鉱石採掘の最盛期。島には2000人近くが居住。
1929年	世界大恐慌に見舞われ沖大東島での採掘事業いったん停止。
1945年	1933年に再開された採掘事業は、戦況の悪化により停止。
1946年	SCAPIN-677により日本の施政権から分離。沖大東島は、北大東村に編入される。
1952年	対日平和条約の発効により米国施政下に。
1956年	アメリカ軍の射爆場となる。
1972年	沖縄返還により本土復帰。

クリック グアノとリン鉱石

島々の歴史と現在

沖ノ鳥島

海洋資源が期待される日本最南端の島

日本最南端の島である沖ノ鳥島は、1931（昭和6）年に「沖ノ鳥島」と名付けられ、それ以来、東京都小笠原支庁の管轄区域に属しています。サンゴ礁でできた礁内は、北小島、東小島が所在しており、浸食を防ぐための保全対策が行われているほか、今後の利活用に向けた様々な取り組みが行われています。



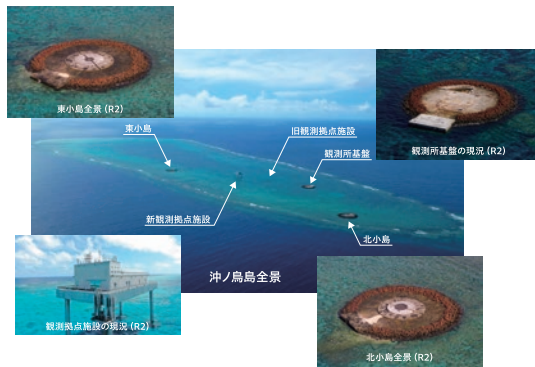
- ・東西に約4.5km、南北に約1.7km、周囲11kmの大きさを持つ、急峻な海山の頂上に発達したサンゴ礁（準卓礁）の島。
- ・干潮時の礁内の面積は約5.8km²（東京ドーム107個分）。
- ・排他的経済水域は、国土面積（約38万km²）を上回る約40万km²。

西暦	できごと
1500年代 1800年代	スペイン船（沖ノ鳥島であるかどうか異論あり）や英国船により発見。英国船が測量。
1923（1922?）年、 1925年	日本の軍艦満州号が測量。
1931年	沖ノ鳥島と命名し、東京都小笠原支庁に編入（内務省告示第163号）。
1939年 1941年	気象観測所や灯台の建設工事が開始されたが、太平洋戦争勃発で中断。
1946年	SCAPIN677。日本の施政権から分離。
1952年	対日平和条約の発効により、米国施政下に。
1968年	小笠原諸島の返還に伴い返還。
1987年 現在	1987年～ 浸食による水没の恐れがあったため護岸設置等の保全工事を実施。 1999年 保全に万全を期すため建設省（当時）による直轄管理区域へ。 2010年 低潮線保全法※が施行され、翌年沖ノ鳥島に低潮保全区域を設定。

※排他的経済水域及び大陸棚の保全及び利用の促進のための低潮線の保全及び拠点施設の整備等に関する法律

沖ノ鳥島の保全・利用の促進

- 沖ノ鳥島の周辺海域は魚の産卵場や回遊経路にあたり、海底にはメタンハイドレートやマンガン等の貴重な鉱物資源が存在します。
- 日本で唯一の熱帯気候で台風の通り道となっており、気象・海象条件が厳しい場所です。このため、満潮時においても水面上にある北小島、東小島の周囲は、護岸コンクリートと鉄製消波ブロックで防護されています。
- 島の保全対策や低潮線を基準に設定される排他的経済水域の権益を守るため、排他的経済水域及び大陸棚の保全及び利用の促進を目的とした様々な取り組みが実施されています。（例：調査・観測、活動拠点整備、サンゴ増殖技術の開発・確立による国土保全、海洋鉱物資源開発の推進、自然環境を活かした新素材の開発など）



提供先：国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所

島々の歴史と現在

島々の現在

豊かな自然と共に生きる父島・母島

自然を尊重し共生してきた歴史

父島・母島を含む小笠原諸島は、海底火山活動によって誕生した海洋島です。一度も大陸と陸続きになったことがなく、海を越えてたどり着いた生物が独自の進化を遂げたことから、多くの固有種が生息・生育し、他に類を見ない生態系を形成しています。このような点が評価され、2011（平成23）年には、世界自然遺産に登録されています。

実は小笠原諸島は、昔から自然と共生してきた歴史があり、近年の「SDGs」「持続可能な社会」などの概念が注目される以前から、この概念に通じる保全活動やエコツーリズム※等の取り組みが行われていました。

※エコツーリズム：自然環境や歴史文化など地域固有の魅力を観光客に伝えることで、その価値や大切さが理解され、保全につながることを目指す観光形態。

アオウミガメ



アオウミガメ
提供：小笠原村観光局

開拓当初から食料として利用され、次第に捕獲頭数が増えた結果、数が激減してしまいました。このため、1883（明治16）年には捕獲規制を導入し、1910（明治43）年には人工ふ化放流事業が開始されました。現在では、関係者による調査・保全活動により、頭数は増加傾向にあります。一方で産卵期の禁漁や捕獲頭数規制等の下行われるウミガメ漁により食利用も継承されており、まさに「持続可能な」形でウミガメと共存しています。

クジラ



ザトウクジラ
提供：小笠原村観光局

小笠原は、1988（昭和63）年日本初のホエールウォッチングが行われた地として知られ、これはクジラへの影響等を考慮した自主ルールの下に行われました。自主ルールは、その後も順次改善され国内の他地域でのホエールウォッチングの自主規制のモデルとされたり、エコツーリズム実践の先駆けの事例となっています。

ネコ —小笠原ネコプロジェクト—



提供：小笠原村



アカガシラカラスバト
提供：小笠原村観光局

小笠原の固有亜種であるアカガシラカラスバトや海鳥が、野生化したネコにより捕食され、生息が危ぶまれたことなどをきっかけに、2005（平成17）年からネコの捕獲が始まりました。捕獲されたネコは東京（本土）の動物病院を経て、里親となった新たな飼い主の下で幸せに暮らしています。このプロジェクトが始まって以降、アカガシラカラスバトの生息数も回復傾向にあります。

自然の中の戦跡

父島・母島は、第2次世界大戦末期に空襲などの攻撃を受けました。島には、防空壕や戦闘機の残骸など戦争の跡が残っています。近年は、悲惨な歴史を繰り返さないための平和学習の対象として、戦跡巡りなどが注目されています。



戦闘機の残骸
個人撮影



魚雷攻撃を受け座礁した船
現在では多くの魚の住処に。
提供：小笠原村観光局

島の食文化

島では、自然環境を活かし、熱帯性の果物・野菜や水産物が生産されています。

イベントなどでふるまわれるウミガメ料理の「カメ煮」や沖サワラ等を使った「島寿司」も有名です。

地酒のラム酒は、島の最初の住民である欧米人や、その後の日本人移住民による砂糖製造などの歴史を背景に、近年、村おこしの一つとして誕生したものです。



カメ煮
提供：小笠原村観光局



戦前の砂糖製造
提供：小笠原村教育委員会



海底熟成ラムMother
提供：小笠原村観光局

未知なる風景が見られる一度は訪れたい南大東島



出典: 国土地理院ウェブサイト

南大東島は沖縄本島の約400km東方（宮崎県の真南）に位置する大東諸島の島で、沖縄県内では6番目に面積が大きく、人口は1,226人（令和2年）。全域が南大東村に属しています。今や航空機の大型化も進み、大自然を堪能できる観光地としても知られるようになりました。

南大東島は、北大東島と共に、サンゴ礁が隆起してできたカルスト地形の珍しい島で、4800万年という時をかけてニューギニア沖から3200kmという果てしない旅を経て今の場所に移動してきました。

また、南大東島は誕生以来一度も大陸とは陸続きになったことのない島であり、ダイトウビロウ、ダイトウオオコウモリ、ダイトウコノハズクなど、多くの珍しい固有の生き物が暮らしています。



提供: (一社) 南大東村観光協会

大池のオヒルギ群落

南大東の北部にあるカルデア湖「大池」（沖縄県最大の自然湖）の北側の湿地帯には、数千本のオヒルギが群生しています。オヒルギはふつう海岸の泥地にマングローブを構成する種であり、オヒルギがこのように内陸部に分布することは、この島の珊瑚礁の発達と地盤の変動の経過を示すものと考えられ、学術上高い価値があると評価されます。

群生地: 沖縄県島尻郡南大東村字北



提供: (一社) 南大東村観光協会

島まるごと館

旧空港跡地の中央にある丸い博物館で南大東島の自然、文化、歴史、産業などを発信しており、天然記念物のダイトウオオコウモリの展示が見られる島の情報がぎゅっと詰まった博物館です。

住所: 沖縄県島尻郡南大東村旧東1

休館日: 月曜日



ダイトウオオコウモリ

提供: (一社) 南大東村観光協会



提供: (一社) 南大東村観光協会

星野洞

サンゴ礁由来の石灰岩洞窟で東洋一美しいといわれる星野洞。サンゴ礁が隆起した南大東島には120を超える鍾乳洞があるといわれていますが、なかでも星野洞は大東諸島で最大の石灰洞窟。発達する鍾乳石などが美しく、最大の石柱は4mもの大きさがあり、世界中の研究者が注目しています。

住所: 沖縄県島尻郡南大東村字北



東海岸植物群落

「海軍棒」と呼ばれる岩礁地帯にあり、ミズガンピなど南方の植物が茂っています。

提供: (一社) 南大東村観光協会



提供: 国立科学博物館

※このウグイスの写真は茨城県で撮影されたものです

最近のニュース

南大東島のウグイスは一味違った「ホーホケキョ」

国立科学博物館動物研究部脊椎動物研究グループが南大東島のウグイスは「ホーホケキョ」の「ケ」の音の周波数が低いと調査結果をまとめました。日本本土では4.5%しかない独特のさえずりが、南大東島では主流になっていることが分かりました。

国の文化財として評価される独自の自然と歴史！ 北大東島



出典：国土地理院ウェブサイト

南大東島から北大東島までは日本一飛行時間が短い航路と言われており、その距離は約13kmで、気候条件が合うと約7分で島間を移動することができます。

戦前からリン鉱石採掘やサトウキビの産地として栄え、今もなおフロンティア・スピリッツを継承し続ける島です。

この島では、独自の自然と歴史が評価されて、国指定の天然記念物、史跡、国選定の重要文化的景観という、3種の貴重な文化財を見ることができます。

島では、これらの文化財を守り、観光や生活に活かしていく取り組みが進められています。

北大東島燐鉱山遺跡【国指定史跡】



燐鉱山遺跡と字港集落
提供：北大東村教育委員会



復原された貯蔵庫遺構
提供：北大東村教育委員会

北大東島燐鉱山遺跡は、採掘場、トロック軌道、棧橋など、採掘・乾燥・運搬・貯蔵・積出という燐鉱山の一連の生産システムを体感することができる国内唯一の貴重な遺跡であることから、2017年2月に国の史跡に指定されました。

北大東島燐鉱山は、戦前に肥料原料の国内の二大産地として、沖大東島とともに国内の食糧生産を支え、栄えました。1950年の閉山後は、厳しい自然環境の中で、損傷を受けながらも多くの遺構が残し、現在も往時の姿をうかがい知ることができます。

貯蔵庫は、特産の石材ドロマイトを積み上げて造られた巨大な建造物で島の景観のシンボルとして島民に親しまれています。南側の石積みは崩壊が進んでいましたが、2020年に復原整備が完成しました。今後も、史跡の保存・活用のための整備が進められています。

住所：沖縄県島尻郡北大東村字港81-11
北大東空港から車で約15分



大正後期のリン鉱山（左：干乾堆積場・トロック軌道、右：リン鉱石貯蔵庫）

北大東島の燐鉱山由来の文化的景観【国選定重要文化的景観】



復原された出張所
提供：北大東村教育委員会

かつて燐鉱山で賑わった社宅街や鉱夫村は時代の変遷の中で字港の集落に受け継がれ、独自の景観を形成しており、その価値が評価されて、2018年10月に国の重要文化的景観に選定されました。

集落をめぐりながら、復原された出張所、現在も住宅や民宿などに利用されており、当時の社宅や倶楽部の建物、ドロマイトの石積み、景観に配慮して修景された神社や整備された住宅など、独自の景観を実感することができます。

住所：沖縄県島尻郡北大東村字港
北大東空港から車で約10分

長幕崖壁及び崖錐の特殊植物群落【国指定天然記念物】



写真上：ダイトウオオコウモリ（南大東島）
提供：（一社）南大東村観光協会

写真下：長幕
提供：© 沖縄観光コンベンションビューロー

北大東島の内陸部を環状に取り囲むサンゴ礁由来の岩稜のうち、南部の約1.5kmは内側が切り立った崖で、まるで屏風を立てたような絶壁となっており、「長幕（ながまく）」と呼ばれています。

この崖は、地形の特性のため開発されなかったため、島の原初環境に近い自然が残り、ダイトウワダン、ヒメタニワタリなどの希少な生物が生育しています。この特徴的な地形と貴重な植物群落が評価され、1975年3月18日に国の天然記念物に指定されています。南大東島と同様、国指定天然記念物のダイトウオオコウモリも生息しています。

住所：沖縄県島尻郡北大東村字南
北大東空港から車で約6分

おわりに

竹島と尖閣諸島について

ここまで見てきたとおり、明治期に日本の領土に編入あるいは日本の領土であることが再確認された島々の多くは、まず民間人が経済的な機会を求めて進出し、その後、経済活動の管理などを目的に、政府により編入などの対応がとられたものです。その事情は、竹島や尖閣諸島についても同様です。

韓国や中国は、日本が侵略的な意図をもってそれぞれ竹島と尖閣諸島を奪ったなどと独自の主張をしております。しかし、竹島も尖閣諸島もそれぞれ島根県（1905年）／沖縄県（1895年）に編入される以前に、朝鮮／中国の領土であった事実はなく、これらの編入は経済活動を契機にするものでした。

竹島の場合

— 中井養三郎、アシカの安定的管理を希望 —

現在の竹島において、アシカの捕獲が本格的に行われるようになったのは、1900 年頃のことです。間もなくアシカ猟は過当競争の状態となり、島根県隠岐島民の中井養三郎は、その事業の安定を図るため、1904（明治37）年9 月、内務・外務・農商務三大臣に対して「りゃんこ島」（現在の竹島の当時の通称）の編入及び10 年間の貸し下げを願い出ました。

中井の出願を受けた政府は、島根県からの意見聴取を行った上で、1905（明治38）年1月28日、島の名前を「竹島」と定め、島根県の所属とし、隠岐島司の所管とすることを閣議決定しました。この閣議決定により、我が国は竹島を領有する意思を再確認しました。



竹島を島根県に編入する閣議決定（1905年）
所蔵：国立公文書館

尖閣諸島の場合

— 沖縄県、尖閣諸島の漁業者の管理を希望 —

尖閣諸島については、北・南大東島の上陸調査後、1885（明治18）年10月、沖縄県による上陸調査が行われました。この時は、国際情勢により国標建設は見送られます。

その後、1889（明治22）頃から尖閣諸島への漁業者の進出が活発となり、遭難事件なども発生します。このため、沖縄県は、1893（明治26）年、漁業者の活動の取締が必要だとして、政府に所轄編入と国標建設を願い出ました。

1895（明治28）年、沖縄県からの願い出を受け、漁業者取締の必要性から、尖閣諸島に国標建設を認め、沖縄県所轄とすることが閣議決定されました。

これにより、日本政府は、尖閣諸島を正式に領土に編入しました。



尖閣諸島を沖縄県に編入する閣議決定（1895年）
所蔵：国立公文書館

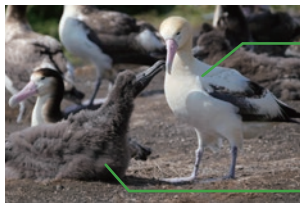
山階芳麿博士と記録映画「STELLER'S ALBATROSS」について



写真提供：山階鳥類研究所

アホウドリについて

アホウドリは北太平洋最大の海鳥で、羽を広げた大きさは、最大で2.4メートルになります。アホウドリは渡り鳥で、夏の間はエサの豊富な北の海（ベーリング海やオホーツク海など）で過ごし、秋から春にかけて南に移動し、繁殖のために離れ小島に上陸します。アホウドリの繁殖地としては、伊豆諸島の鳥島、尖閣諸島（南小島、北小島）、小笠原諸島（鴎島）、ミッドウェー環礁などが挙げられます。明治期からの乱獲により一時期絶滅が危ぶまれましたが、関係者・機関の尽力により生息数は6,000羽を越えるまでに回復しました。



成鳥

全長：約80～90cm
体重：約4～7kg

ひな

和名：アホウドリ

学名：Phoebastria albatrus

英名：Short-tailed Albatross

分類群：ミズナギドリ目アホウドリ科

保護の状況：特別天然記念物（文化財保護法）

国内希少野生動植物種（種の保存法）

絶滅危惧Ⅱ類（環境省レッドデータブック改訂版 2020）

山階芳麿博士は、山階鳥類研究所の創設者であり、日本を代表する鳥類学者の一人です。染色体を用いて分類する方法を鳥類の分類に導入して、国の内外から高く評価されました。山階博士は、研究だけでなく、鳥類保護にも熱意を注ぎ、1977（昭和52）年には、鳥学の世界のノーベル賞とも言われる、ジャン・デラクール賞を受賞しています。

放映している記録映画は、山階博士が1930（昭和5）年に鳥島を訪れた際に撮影されたもので、かつて鳥島に多数のアホウドリが生息していたことを示す唯一の映像です。

記録映画キャプション

キャプション	日本語訳（領土・主権展示館訳）
Steller's Albatross	アホウドリ
Produced by Marquis Y.Yamashina	制作（侯爵）山階芳麿侯爵
Here comes an albatross skimming over the ocean.	海の上すれすれにアホウドリが飛んできます。
They rest their wings on volcanic Torishima Island, almost uninhabited.	アホウドリは、ほぼ無人の火山島「鳥島」で羽を休めます。
An ancient crater	旧噴火口
Three species of albatross choose their nesting place along the volcanic slope.	3種*のアホウドリは火山の傾斜面で営巣しています。*アホウドリ、コアホウドリ、クロアシアホウドリのこと ※アホウドリ、コアホウドリ、クロアシアホウドリのこと
The Laysan Albaross, Diomedea immutabilis, is the smallest member, first nested some twenty years ago. Now twenty-five pairs bring up their families.	（3種の中で）最も小さいコアホウドリは、約20年前に初めて（鳥島で）営巣し、今では（1930年当時）、25つがいが繁殖しています。
Steller's Albatross, Diomedea Albatross, is the largest, going out for a walk with the babies.	（3種の中で）最も大きいアホウドリがヒナと共に歩き回っています。
Babies yet unable to walk are brown and quite as large as their parents.	まだ歩けないヒナは茶色をしています。それでももう両親と同じくらいの大きさです。
The only means against the enemy is to throw out fish oil which has an unbearable smell.	敵から身を守るための唯一の手段は、耐えがたいにおいがするフィッシュオイルを口から吐き出すことです。
In early summer they are ready to take their wing over the ocean on their northerly migration.	初夏には、海を越えて北に渡る準備が整います。